資料５

読売新聞　令和５年 (2023)11 月 26 日



# 柏の旧軍施設 国文化財に

## 文化審答申 歴史教育活用を検討

柏市根戸に現存する旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室が、国の登録有形文化財（建造物）になる見通しとなった。国の文化審議会が24日、文部科学相に答申した。特殊な用途に利用された旧軍施設の遺構として貴重だと評価され、登録基準の「再現することが容易でないもの」に該当するとされた。

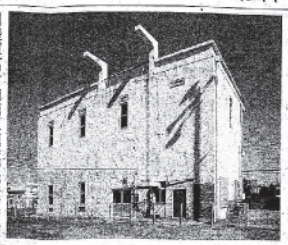
官報による告示を経て、来春に登録される見通し。登録されれば、県内の登録有形文化財（建造物）は305件になる。

県教育委員会によると、同施設は、柏市の旧陸軍高射砲第二連隊跡に立つ防空訓練施設で、1938年頃に建てられた。

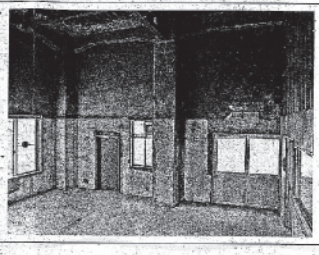
建物は箱形で、内部には窓が少ない吹き抜けの空間がある。旧陸軍は、この天井などに航空機の影を投影し、影の動きに合わせて「照空灯」を当てる訓練を行った。「照空灯」は夜間の空襲の際、敵の航空機を高射砲で攻撃しやすいように上空を照らすものだ。屋上は、航空機の速度や距離を測定する訓練に使われた。

戦後は空き家となっていたが、67年からは市西部消防署根戸分署として使われていた。市は来年2月頃、記念セレモニーを行う予定という。

太田和美市長は「同種の施設は国内に2か所しか現存していない。重要な文化財なので歴史教育などへの活用を検討する」と話している。



旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室（いずれも柏市教育委員会提供）



旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室の内部

朝日新聞　令和５年 (2023)11 月 25 日



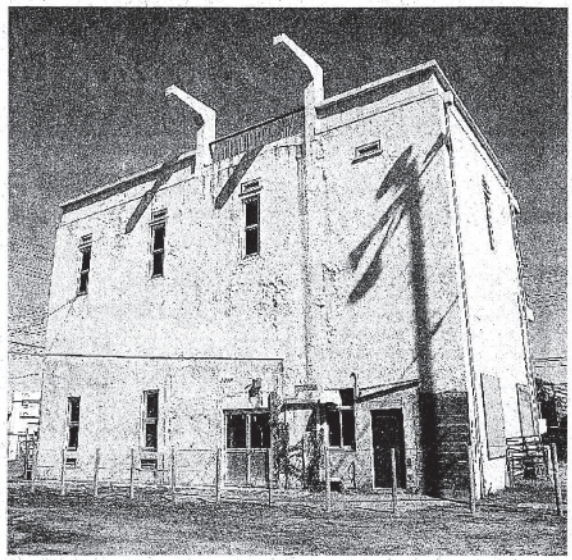
朝日新聞 R5 11/25(土)

# 柏の高射砲訓練所 国有形文化財に

## 一時取り壊し危機→住民ら保存訴え

戦後78年

柏市根戸にある旧陸軍高射砲第二連隊の防空訓練施設「照空予習室」が国の登録有形文化財に登録される見通しになった。一時は取り壊しが決まっていたが、調査で数少ない戦争遺跡と分かり、住民らが保存を訴えていた。



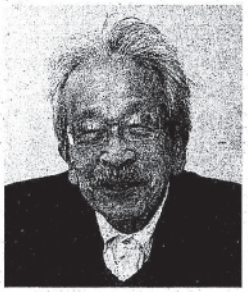
登録される「照空予習室」＝根戸、柏歴史クラブ提供

国の文化審議会が24日、文部科学大臣に答申した。登録されると、県内の登録有形文化財（建造物）は305件になる。

施設は1938年ごろに建てられた。鉄筋コンクリート造りで間口8㍍、奥行き16㍍。高さは10㍍あり、吹き抜けになっていて3階建てに相当する。同様の施設が残るのは柏市と兵庫県加古川市だけで、起重機（クレーン）の支柱は柏市にしかない。

吹き抜けの空間につるしたキャンバス地に風景を描き、雲を投影することで、さまざまな時間帯の空を再現する。そこに飛行機の影を映し、指示を出す訓練をした。屋上ではクレーンで引き上げた「測遠機」を使い、飛行機との距離を測ったと推定される。

施設は存在を忘れられていた。東京を守るために置かれた高射砲第二連隊の主力は3年で都内に移転し、その後は軍馬の餌を保管する「馬糧庫」になった。使っていない時期を挟み、67年～2009年は消防署の分署だった。現在は戸建て住宅やマンションに囲まれ



柏歴史クラブの上山和雄代表

# 来年度に防水工事 通年の公開模索へ

所有する市は老朽化を理由に取り壊す方針を示した。文化財として記録を残そうと、市教育委員会が14年から調査に乗り出したところ、ほかの馬糧庫とは形状が違った。戦前に日本が統治した朝鮮半島などに同じ形態の建物があり、高射砲連隊の施設と判明した。

地域の歴史を調べている市民団体「柏歴史クラブ」は市教委の調査結果を受け、15年から地元の町内会と毎年秋に施設の希少性を伝える公開イベントを開いている。

クラブの代表で日本近現代史が専門の上山和雄国学院大名誉教授(77)は「柏に『帝都東京』を守る施設が造られていた。東京のベッドタウンだけではない重要性が戦前から理解されていた証拠」と指摘する。

施設の価値を訴えてきたクラブのメンバーは今回の登録で多くの人に知ってもらい、保存への道筋が開けると期待している。上山さんは「年間を通じて見学できる場所になってほしい」と願う。

市教委とクラブ、町内会は来年2月、登録を祝うイベントを開く予定。市教委の担当者は「市役所内だけで訴えても、保存に結びつかなかった可能性は高い」。住民とクラブの活動が後押ししたと考えている。

施設の維持と管理をする市教委は来年度、防水工事をして劣化を防ぐ対策を講じる。安全が確保される場合、通年の公開ができないか模索する。（斎藤茂洋）

千葉日報　令和５年(2023)11月25日

# 柏の防空訓練施設 国文化財に

## 旧陸軍の貴重な遺構と評価

国の文化審議会は24日、柏市根戸の防空訓練施設「旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室」など38都道府県の建造物290件を登録有形文化財にするよう盛山正仁文部科学大臣に答申した。柏の施設は「特殊な用途の旧軍施設の遺構として貴重」と評価された。県内の登録有形文化財（建造物）は305件となる。

### 今も残るクレーン支柱

柏市教委によると、市内の建造物では「伊藤家住宅主屋ほか」（6件）、「染谷家住宅主屋ほか」（8件）に続く15件目の登録となる。

防空訓練施設が建つ一帯は住宅街となっているが、戦前は「帝都」防空を目的に、旧陸軍高射砲第二連隊が使用。市教委によると、1938年ごろ、敵機にサーチライトを照射、射撃の指揮を執る訓練施設として建設された。柏飛行場もあり、「軍都柏」と称された姿を今に伝える。

窓が少なく吹き抜けの一室だった施設内では、天井や壁に幕を張り、時間帯により色合いの異なる空の状態や飛行機を映し出して照射などの訓練が行われた。屋上からは軍事専用の測遠機を用い、敵機の位置を把握する訓練を実施。施設前の営庭にはケーブルでつながれた鉄塔が並び、つるされた飛行機の模型を使い地上から敵機の位置測定を訓練した。

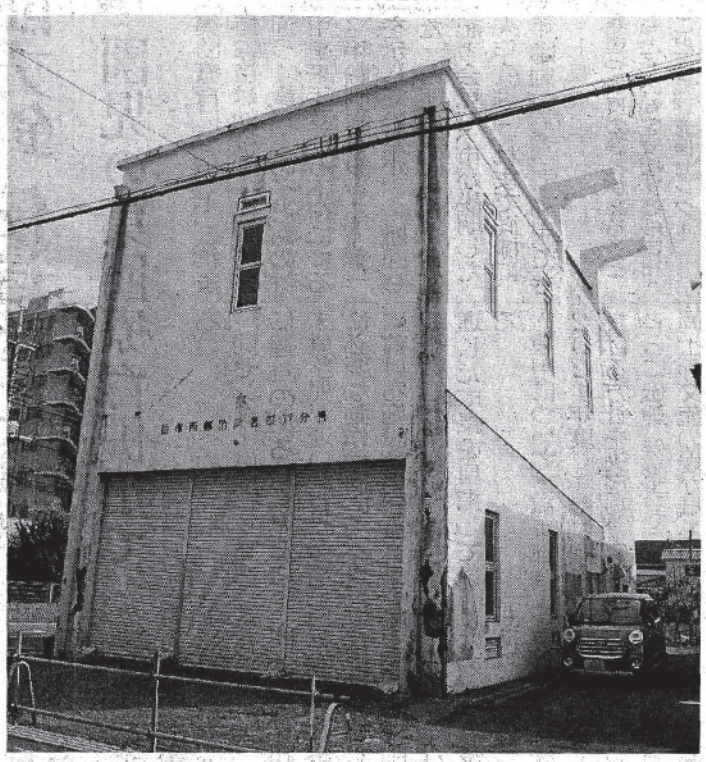
同種の施設は国内外に7カ所あったが、現存は2棟のみ。柏の施設は、屋上に重さ数百キロになる測遠機を昇降するため使われた一対のクレーン支柱がそびえ立つ。支柱が残るのは柏の施設だけで、史跡としての価値を高めている。

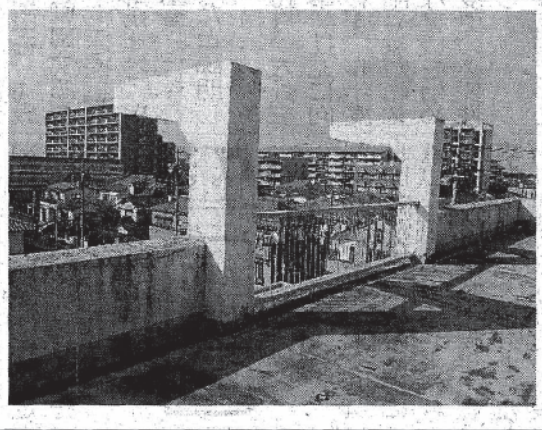
同連隊は41年に東京に移転。地元では施設は軍馬の餌を保管する馬糧庫として使用されたと伝えられた。67～2009年には旧西部消防署根戸分署として活用。当初の用途は忘れ去られたが、同分署移転に伴い施設の解体が検討されると市教委の調査で史跡としての価値が判明、保存が決まった。

地元高野台町会の阿部良一副会長(73)は子ども時代を振り返り「用途不明の謎の建築物。天井まで続く室内のはしごを度胸試しで上るなど、格好の冒険の場だった」と話した。今は町会の物置として利用し、年1回だけ一般公開している。

登録を記念して来年2月に、専門家の講演会などのイベントも行う予定だ。

太田和美市長は「歴史的に大変重要。生涯学習や学校教育の資料として活用したい」と登録を歓迎した。



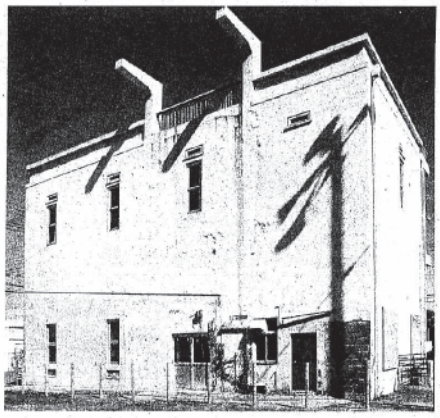


国登録有形文化財として答申を受けた柏市の「旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室」（写真上）、屋上には、測遠器の昇降に使うクレーンの支柱が今も威容を誇る＝21日、柏市

産経新聞　令和５年 (2023)11 月 25 日

# 柏市「高射砲第二連隊照空予習室」
# 旧陸軍施設　国登録文化財へ

国の文化審議会は24日、柏市に現存する旧陸軍の演習施設「旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室」（柏市根戸443の3）を国の登録有形文化財に登録するよう、文部科学相に答申した。県教育庁によると、登録基準の「再現することが容易でないもの」に該当する。答申後、正式に登録されれば、県内の登録有形文化財（建造物）は305件になる。



上に突き出ているのが特徴的なクレーン支柱（いずれも柏市教育委員会提供）

施設の室内は、かつては吹き抜けだった

柏市によると、この施設は旧陸軍の高射砲第二連隊跡に建つ防空訓練施設。昭和12年に現在の柏の葉地区一帯に旧陸軍柏飛行場が開設されたのに合わせ、翌13年ごろに建てられた。

建物内部には窓が少ない吹き抜けの空間があり、そこにつるした帆布に風景を描き、さまざまな時間帯の空を作り出す。その上で飛行機の影を映し、影が動くのに合わせて照明を当てる照空灯操作訓練を行った。

屋上は測量の訓練所で、西面に残るクレーン支柱を使い、測遠器（測量機器）を昇降させていた。遠くに離れた鉄塔と鉄塔の間にかけたワイヤに飛行機の模型をかけ、屋上からの距離や高度、飛ぶ方向を測った。

同種の建物は柏市と兵庫県加古川市の2カ所に現存する。起重機装置（エレベーター）の支柱が残るのは柏市のケースが国内唯一だ。それだけ歴史的重要性や希少性が極めて高い。

戦後、昭和42年に消防署に改修された。平成21年まで西部消防署根戸分署として使われた後、建造物の調査が進められた。

地元の「柏歴史クラブ」は、柏市を中心に歴史調査などをしている。

同クラブの上山和雄代表（国学院大名誉教授＝日本近現代史）は「老朽化で解体する話もあったが、建物の外観は加古川市のものと比べても、戦争当時の外観をとどめており、文化財として大変、貴重だ」と説明し、国の登録を受けるのを心待ちにしている。

来年2月には市や地元の町会と連携し、施設の公開イベントや講演会を計画している。

上山代表は「戦争を伝える柏市の重要な施設の1つ。市民にもっと知ってもらえるよう、常時、公開できないか、市にお願いしたい」と語る。

柏市内での登録有形文化財（建造物）登録は「増尾の伊藤家住宅」「鷲野谷の染谷家住宅」に続き、3件目。

柏市民新聞　令和５年 (2023)12 月 8 日

# 照空予習室が国登録へ
## 市内３件目

根戸にある旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室が、国の登録有形文化財（建造物）になる―。先月24日に開かれた国の文化審議会が盛山正仁文科相に登録するよう答申。今後の官報告示を経て登録される。同件数は1万4035件となる予定だ。

所管する柏市教委文化課によると、市内の登録有形文化財は、増尾の伊藤家住宅と鷲野谷の染谷家住宅に次いで3件目になる。千葉県内の同件数は305件。

建物は昭和42年から平成21年まで、柏市消防局の根戸分署として活用され、平成29年まで地元の高野台町会や富勢商店会が利用。平成25年の根戸分署移転に伴い解体が決定したが、文化調査で貴重な戦跡と判明した。

平成29年度に文化庁調査官が現地を調べ、登録の条件を満たす物件であると判断。柏市では、関連する柏市文化財保存活用地域計画完成後の今年5月に登録申請した。

答申された新規登録件数は290件。旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室は、登録基準の「再現することが容易でないもの」を満たした。

照空予習室では、投影機で帆布を張った壁や天井に機影を映し出し、敵機に見立てて攻撃の指揮訓練を行っていた。屋上は距離測定の訓練所だった。屋上に伸びる2本の角は、測遠器を昇降させるもの。

こうした特殊な用途の戦跡は、昭和10年代にわずかしか建てられておらず、現存するのは、加古川の民間所有と柏市の2例のみ。答申では、「特殊な用途の旧軍施設の遺構として貴重」としている。柏市の照空予習室は昭和13年頃の完成とみられ、空き家となっていた昭和中期に消防分署へと改装された模様だ。

東京新聞　令和５年(2023)11月29日

# 国の登録文化財に

## 柏の旧陸軍訓練施設

## 「特殊な用途の遺構として貴重」

柏市に残る戦争遺跡「旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室」（同市根戸）を国の登録有形文化財（建造物）に登録するよう、文化審議会が文部科学相に答申した。「特殊な用途の旧軍施設の遺構として貴重」と評価している。（林容史）

答申は24日付。同市文化課によると、旧陸軍が首都防空の一環で建設した訓練施設で、同種のものは兵庫県加古川市にしか残っていない。外壁に機材を昇降するクレーン支柱があるのは全国で唯一という。

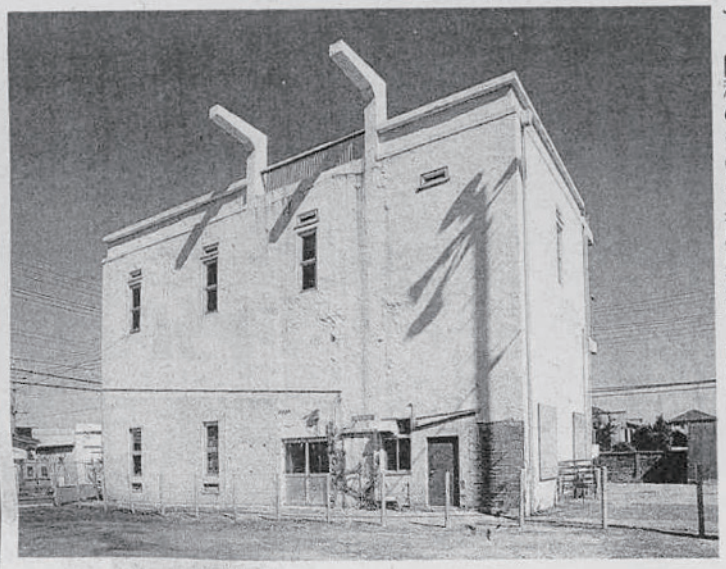
鉄筋コンクリート造りで間口約8㍍、奥行き約16㍍、高さ約10㍍、床面積約128平方㍍。市川・国府台で開設された高射砲第二連隊が移転してきた1938年頃に建造されたとされる。

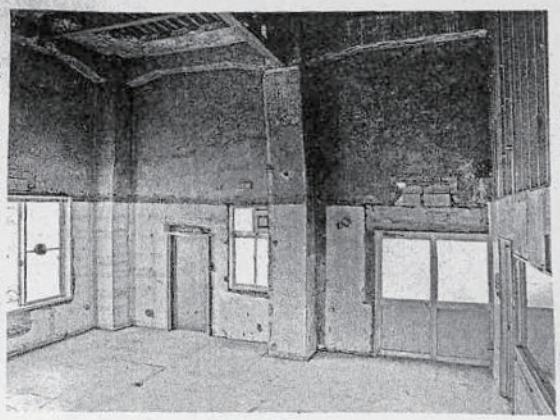
完成時、内部は窓の少ない大空間になっていて、天井などに航空機像を投影し、夜間、敵機を照らし出す「照空灯」を操作する訓練が行われた。屋上は距離測定の訓練所で、「測遠機」をクレーンでつり上げて使った。

建物は、67～2009年に消防署の分署などが入居し、2階部分を増築して、地元の商店会と町会が集会室として使っていた。市西部消防署根戸分署が移転したため取り壊す予定だったが、文化課が調査した結果、貴重な建物と分かり、解体を免れていた。

同課の担当者は「建物の安全性を確保した上で、市民団体や地元町会と活用の仕方を探っていきたい」と話している。

市内の登録有形文化財（建造物）は、伝統的な農家の屋敷構えを残す伊藤家住宅、江戸～明治期に建築された名主屋敷の染谷家住宅に続き3件目で、名勝を含めた全体では5件目になる。





上西側外壁面にクレーン支柱が残る旧陸軍高射砲第二連隊照空予習室
下夜空に敵機を照らし出す訓練に使われた室内＝いずれも柏市で（市文化課提供）